

第三十六章 怨念の海

投票日の十月七日は、前夜から降り続いた雨が一層雨足を強め、時折横なぐりの吹き降りをまじえて切れ目がなかった。台風の影響で、中国、四国、九州を除く本州全域は厚い雨雲に蔽われ、ところによっては暴風雨の様相を呈していた。

午前九時過ぎ、大平首相は、志げ子夫人と共に、私邸に近い瀬田小学校の投票所に向かった。記者団に囲まれた首相は悪天候の影響を聞かれて、「全国的に雨が……。(自民党の議席への影響は)わからんね。早く小降りになって晴れてほしい。投票率は上がった方がいい」と降りしきる雨に祈るような表情をみせた。しかし、雨は激しさを増すばかりで、投票の出足は悪い。首都圏や東海地方の各選挙区では、前回選挙より軒なみ一〇%前後も投票率が落ちている。そのまま午後一杯が過ぎ、投票時間は終了した。

夜九時、大平首相は党本部四階ロビーの開票本部に姿を現わした。

開票は順調に進んでおり、各県で強い候補者の当選が決まって行く。大平首相を中心に、斎藤邦吉幹事長、徳永正利参議院議長会長ら党幹部が開票状況をじっと見つめている。九時までの当選者数は好調だった。次々と当確が伝えられると、喚声と拍手があがった。

だが、十時半を過ぎる頃になると当選者の伸びがバタツと止まった。僅差で野党とせり合っていた候補者が次々と敗北する。絶対確実を予想され、当選を読んでいた大物で落選するものが出てくる。関東、東海、近畿が悪い。先ほどまで沸き立っていた開票本部から一人去り、二人去り、幹部の数が減っていく。

公認候補、保守系無所属を加えて、二百六十二、三人になれば念願の予算委員会の逆転は解消できるのだが……、悪くとも前回を下回ることはないだろう。こんな計算を胸に首相は十一時に私邸に帰り、そのままテレビを見つづけた。

開票は、大都市や北海道などの翌日分を残している。だが、五〇%台の投票率しかなかった東京や大阪で強気な読みはできなかった。

大平首相は七日深更から候補者名簿をにらみ、一睡もせずに八日の朝を迎えた。朝刊各紙は一斉に自民党の敗北の見出しをかかげている。「二百五十三は行けるかな」とつぶやく大平首相。目標や予想が高かっただけに、その衝撃は大きかった。自ら企図し、一挙に政局安定の基盤を確立すべく乾坤一擲の勝負に出た首相の胸中には、測り知れぬ敗北感が渦巻いていた。

この朝、私邸を出て党本部に向かう首相は記者たちに対して、「少なくとも無所属を入れて安定多数は確保できると思うたが……」と自民の不振を認め、自らの姿勢については「精一杯やって審判を受けることだけ考えていたから悔いはない。いずれにしろ結果は厳粛に受けとめる」とコメントした。

午前十時少し前、大平は、重たい胸を抱いて党本部の総裁室に入り、十時半から約二十分ほど選挙対策本部に姿を現したが、不利な戦況を見るにしのびず、幹事長室に引きこもって、自党の候補者の苦戦を一喜一憂しながら見守った。

都市周辺部では、自民党の大物や有力候補者がパタパタと落選した。愛知一区、大阪三区では、自民党候補者が一人の当選も果たさず、東京一区、八区、十区ではいずれも議席を減らす羽目となった。京都二区でも大物候補者が落選した。悲報が伝えられるたびに、大平は、「ああ、あれもダメか」と溜息をついた。「油断だなあ」ともつぶやいた。十二時をまわる頃には、二、三の選挙区を残すのみとなったが、その頃には、解散前の議席数の維持も難しく、保守系無所属の当選者の入党を加えてもかろうじて単純過半数を確保できるかどうかの状況となっていた。大平首相は、押し黙って、テレビの画面を見つめつづけた。

その時、平河クラブ（自民党担当記者会）から懇談の申込みがあった。「断るわけにもいかんだろうな。しかし、大変な

結果になったもんだ」と力なく答える大平首相の胸の中には、責任をとって辞任しようという気持がよぎっていた。記者懇談は十二時四十五分から始まる予定であつたが、残された選挙区で接戦が続き、「一議席でも」と思う大平は、テレビに食い入り、珍しく五分間遅刻した。大平は、「まだ未定のところが一、二あるが、無所属からの入党者を含めても、過半数獲得が微妙な段階だ。大変厳しい限界状況にある」と予想外の不調を率直に認め、その責任については、「いま重要な立場にあるので、どう対処したらいいのか、政治をあずかる身なので、軽々に言えない。慎重にとくと考えた」と微妙な発言をした。「責任をとくと考える」という表現は、ことの重大さから明言こそ避けているが、その底には、辞職せざるをえないという気持があつた。表情からも、それがうかがえた。この感触は記者たちにも伝わり、全国に報道された。

大平首相は、午後三時、アルゼンチンのヒテラ大統領の歓迎式にいったん外出し、三時に党本部に戻り、総裁室にこもつた。選挙区に帰っていた伊東正義、田中六助、佐々木義武等の腹心は、首相が辞任に傾いているとの報道に驚き、「軽率なことを言ってくれるな」、「弱気になつてはいけない」と次々と激励の電話をかけてきた。

八日の午後三時過ぎ、最後の一議席が確定した。開票の結果を前回と比較すると、次のとおりである。

	(今回)	(前回)
自民党	一四八	一四九
社会党	一〇七	一三三
公明党	五七	五五
共産党	三九	一七
民社党	三五	二九
新自由クラブ	四	一七
社民連	二	〇
無所属	一九(うち保守系一四)	二二

自民党の当選者数は、前回（昭和五十一年）の三木政権下における任期満了選挙の結果を一議席下回った。しかし、の後直ちに保守系無所属十名の入党が決められたため、議席数は二百五十八に達し、過半数は辛うじて確保した。

大平首相は、総裁室でテレビの報道を見ながら、孤独な沈思を続けた。辞めるべきか、止まって職務を果たすべきか、理大な決断の時が迫ってくる。はた目にもわかるほど、その心境は揺れに揺れていた。首相が自分の個人的心情やこれまでの経緯に対する責任などに思いをめぐらしながらも、ここは苦しくとも困難な政局を一身に背負っていく方が党総裁としての責務を全うする道であると肚を固めたのは、午後四時の平河クラブとの会見の直前であった。この会見は大平が選挙後初めて国民の前に見解を明らかにする公式の場である。ここに到る数時間は大平の生涯にとって最も苦悩に満ちたものの一つであったろう。

定刻より少し遅れて記者会見に臨んだ大平首相は、「率直にいつて予想以上に厳しい審判を受けた、これに対し、謙虚に受け止め、今後の党運営、政策運営の戒めとしたい」と語り、選挙結果の責任については、「政治全体に重い立場にあり、誰よりも深刻に受け止めている。この結果をふまえた上で、国民の意志がどういうところで表われているかを掌握して、これからの施政の上で生かしていく」と引き続き政権を担当し、その上で自らの政治責任を果たすという態度を表明した。言にくい言葉を一語一語絞り出すような苦渋に満ちた会見であった。

この会見で首相はさらに、その具体的方策として、「全党的体制で政治に取り組むこと」、そのため「党内実力者との会談を行うこと」、さらに「従来以上に野党との話し合いによる協調路線を重視していくこと」などの諸点を明らかにした。政治責任問題で党内に一波瀾あることは覚悟の上で、政権を担当する意志を明確にしたのである。

九日の朝刊各紙は、いずれも総選挙の責任をめぐって政局が相当な荒れ模様になるという見方では一致していた。長かった佐藤時代のとを受けて一九七〇年代の自民党は、田中、三木、福田、大平と続く政権抗争に明け暮れていた。大平に先立つ三政権とも、政権の寿命は平均二年二月、三代の首相はいずれも無念の思いで首相の座から退かざるをえなかったのである。大平政権は、こうした三代の政権の間に蓄積された怨念が爆発点近くまで高まった時点で発足した政権であった。

特に解散問題については、三木元首相も福田前首相も在任中、幾度か解散を実施しようとして、その度に封ぜられた苦しい思い出があつた。しかも、大平はこの二人に対して、それぞれ解散を封ずる側の代表者の一人であつた。それだけに大平が解散に持ち込んだ手法や経緯、総選挙の展開については両派に憤懣が蓄積していた。したがつて、問題は、三木、福田、中曾根ら非主流三派の対応いかんであつた。三木元首相は、八日、いち早く「政治家は責任のけじめをきちんとすべきだ」と責任追及の姿勢を明確にしたが、福田前首相は「大平氏の責任を云々する前に自民党が謙虚に反省すべきだ」と大局の見地に立つており、中曾根元幹事長も、はっきりとした態度を示していなかつた。自民党首脳の大部分は、国民の選択した与野党伯仲という事態の中でどう対処していくべきか、まずその点を見極めねばならないという態度であつた。世論は、大平執行部の解散 総選挙に臨んだ目標と比較して「大敗」と批判を加えたが、大平の退陣、政権の交代を主張するまでにはいたつていなかつた。党内の大方も、まだ選挙区にあつて政局の展開を模様眺めしていた。

この選挙の結果を見ると自民党は事前の世論調査と比べて極端に不振ではあつたが、社会党も十六議席を減らしており、革新が勝つたとは言えなかつた。さらに、新自由クラブも十三議席を失つている。これに対し、公明、共産、民社の三党が議席を大きく伸ばした。これで見るかぎり、全国的な豪雨という気象上の悪条件は支持強度の強い政党に有利に働いていた。その意味では、雨が選挙の情勢を狂わした最大の原因であつた。因みに、この選挙の投票率は六八・〇一%、戦後二番目の低さであつた。地域別に見ても、この投票率の低さは豪雨に見舞われた地域の極端な棄権の増大によつてもたらされたものであることは明らかであり、ここに自民党不振の原因があつた。一方、自民党は議席こそたしかに一議席減らしたが、得票率は前回の四一・八%に対し、今回は四四・六%と一・八ポイント増加している。もちろん、世論の猛反撃にあつた「増税路線」がたたつたことも事実であるが、事前の調査で圧倒的に強いと見られた候補者の落選が目立つたのには、選挙ムードのよさにまどわされた陣営の気のゆるみがあつたことも見逃せない。加うるに選挙戦中盤以降、鉄建公団の不正経理事件などの不祥事が連日大きく報道され、これが増税批判論に相乗効果を与え、投票日一週間前頃から自民党の支持率が大幅に下降したことが自民党の不振に拍車をかけたと言えよう。大平首相にとっては思わざる誤算であり不

運でもあった。

選挙結果について海外のマスコミ論調はより冷静であった。たとえば『クリスチャン・サイエンス・モニター』紙は、自民党が結果的に単独過半数を確保したことから、「議会制民主主義に従えば、大平首相はこの選挙で勝利を収めた」という見解を示していた。議会制民主主義の原則から言えば、自民党は過半数を確保しており、勝ち負けの基準は前記の外国特派員の述べるとおりであるが、日本の政局で問題なのは政治論的な勝ち負けであり、責任であった。

十一日には、中川一郎らのグループ 自由革新同友会 が、「重大な結果を招いた大平総裁の責任は免れることはできない。この責任を明らかにして党の再建をはかるべきだ」と公然と退陣要求を打ち上げたが、福田前首相は「慎重にやれと（大平に）言っておったのに、あんなことになった……座して看るの一語につきる」と慎重な態度を示した。

このような情勢の中を、西村副総裁は十一日から党内調整に動き、十五日には大平・西村、大平・三木、十六日には大平・中曾根、十七日には大平・福田の実力者会談が行われることとなった。

十五日の党本部総裁室での大平・三木会談後、三木元首相は、大平総裁の責任について「国民の納得のいく形でけじめをつける」ことを主張し、首相の進退問題に言及したが、それは間接的な表現だった。十六日、中曾根元幹事長は、「大平総裁が全党員に総選挙敗北に遺憾の意を正式に表明し、全党的体制をいかに築くか早急に検討する。その具体的手順としては、少数の実力者による調整機関を設け、進退をこの機関にゆだね、そこで再び大平氏が総裁に選ばれるなら、それでいい」と自らの案を提示した。この十五、十六の二日間の会談で、強硬な言辞を示していた三木元首相の迫り方が直截ではなく、不気味であったが、まだ全面的な政変にいたるとは観測されなかった。

あとは、これまで一番慎重な発言をし、大平と話し合う余地も期待できる福田前首相との会談を残すだけとなった。十七日の朝、私邸を発つ大平首相に記者団は、「ヤマは越えたと考えますか」と質問した。大平は「山上山ありだ。山はいくつもあるよ」と好きな詩の一節を引用して心境を示した。

大平・福田会談は、十七日午後二時から党本部総裁室で開かれることになっていた。その直前、同じ階の幹事長室で待

機していた大平首相のもとに、「福田氏は今日は自分のことはいっさい考えない。差しちがえる覚悟でやってくる」と言
つて事務所を出た」という情報がいいた。

会談は、総裁室に二人だけが残り、扉が閉められると、いきなり緊迫したやりとりに入った。

福田「きょうは君がキリスト、私は神だ。ひとつキリストと神との裸の会談をしよう。時局は重大であり、まかりまち
がえばイタリアのようになるかもしれない。だから腹を割って話合いをしよう……」
敵しい切出し方であった。

福田「党は政局の見方について混乱している。方程式は簡単だ。混乱の原因は責任論と事態の收拾論をこっちゃんに考え
ていることだ。分けて考えるべきだ。第一の責任論は簡単である。総選挙の結果、すなわち国民の審判の重さを踏まえ、
かつ国民にわかりやすい処置を進言する」

大平「それは私にやめろという意味か」

福田「おそれ多いことだがね」

大平「総選挙の結果を見て私にやめろ、というほどの責任が国民的判断で下されたとは思わない。……これから難問が
山積しているので、全力投球で解決にあたるのが責任を果たすことになる。党の機関で私にやめろと言わない限り、やめ
ることはできない。私にやめろということは、私に責任を放棄せよ、死ね、ということになる。党の機関に移して決着を
つけたい」

福田「それはどうか。……そういう問題は党の機関でどうのこうののではなく、自分から決断すべき問題ではないか」

こういったやりとりが続いて、大平は党の意思決定機関である両院議員総会で論議することを主張し、福田は首班決定
選挙が先だから代議士会でやることを主張したと伝えられた。ここに掲載した会談のやりとりは、会談後、双方の発表な
どを集めて新聞が報道したものの一部である。したがって、実際の表現や前後関係は明らかではないが、緊張した一時間
四十分のやりとりであったことは想像がつく。

大平にとつては、問題を責任論と收拾論に分け、まず問答無用で引責辞職せよ、收拾論はその後別次元の話だと言いつた。福田前首相の態度は、始めから事態收拾のための話し合いとは受け取れなかったであろう。また福田にとつては、大平の両院議員総会説は、自分の責任を棚上げして、数の力で強引に居坐る態度のように見えたのである。大平には、話し合いをしてどうにも結論が得られなくなったら、最後にはルールに従うのが最もフェアな、民主的な問題解決方法であるという哲学があつたが、極度に激した状況では、哲学を説明しているゆとりはなかつたにちがいない。

お互いの不信感が触発された後では、どう言い直しても、円満な話し合いに戻ることは困難である。この日を境に、福田派は態度を一挙に硬化させ、三木派の論調と同一路線に近づき、政局の流れは形式的責任論から倒閣・政権抗争へと質を変えはじめた。

選挙後すでに十日以上を経過している。特別国会の召集期限の問題もあり、大平側は何としても話し合いによって党内を円満に取りまとめなければならなかつた。そこで西村副総裁をわずらわし、再度、個別会談をセツトすることを依頼した。二十日の福田・西村会談では、福田前首相が、大平総裁が西村副総裁に進退を一任するのでなければ、話し合っても無駄だとして、総裁の進退一任を話し合いの前提とした。

だが、自民党総裁が副総裁に進退を一任するということは、総裁の辞意表明と同一の意味を持つものであつた。総裁が進退を一任すれば、党則上は総裁に事故があつた場合とみなされ、総裁は死に体となり、副総裁が総裁を代行することになる。田中政権末期の椎名副総裁の立場がそれであつた。

そこで、大平は、調整の取りまとめを一任するという形をとることにした。そこから、進退を一任したのか、しないのか、一般の人には理解できない論議が十日間もつづくことになる。

いつまでたつてもラチのあかない自民党の政争に国民不在という批判が出はじめ、「やめろ」「やめない」という政権をめぐる醜い私闘という印象が強まってきた。大平首相としては自分の心情とは全く異なる方向に流れていく政局に、針の筵に坐らせられているような毎日であつた。この頃、大平首相は、私邸から党本部に向かう車中で同乗した加藤官房副長

官に、「総理・總裁の地位にいる僕には辞めたくても辞める自由がないんだよ。僕が辞めて党内が丸くおさまるなら何の未練もないが、僕が辞めたからといって党内の混乱がおさまるとは思えない。要は辞めた方がおさまるのか、辞めない方がおさまるのか、いずれにしてもレス・ワースの選択しかないのだ……」と苦しい心境を語った。せめて引ききりだけはきれいにしたい」と常々語っていた大平にすれば、自分一人で済むことなら一刻も早く辞めてサバサバとしたかったであろう。だが、辞任した後の政局の混乱を考えると、收拾について具体的な方策が見つからないままに辞めることは、大平にとつてはあまりに無責任に思えた。その意味で辞める自由はなかったのである。しかし、批判者から見れば、このような大平の態度は政權に恋々としていると映ったであろう。

西村副總裁の努力により、二十四日に第二回の大平・福田会談が行われたが、ここでも、福田前首相は大平辞任論で一步も引かず、延々三時間にも及ぶ会談の結果は「平行線ではないがクロスしない」と微妙な発表となった。

翌二十五日には、大平・三木、大平・中曾根の会談が持たれたが、福田の反大平強硬論に非主流派が勢いを得たこともあつて、両会談とも前回より厳しいものとなった。

この夜から、党内情勢に第二の転機が兆した。三木、福田、中曾根の非主流派の中で、いわゆる「受け皿」の問題が協議されはじめたのである。非主流派がはつきり倒閣に踏み切るためには、後継政權の座には誰がつくのか、どのような性格の政權になるのが決まっていなければならない。三木おろしの末期、三木元首相が福田、大平にこの点を問いかけて両者をたじろがせ、その結果、福田、大平間の覚書ができたことは、すでに記したところである。受け皿論議がはじまると、これまで派内の反大平論者をおさえ、どちらかと言えば中立的な立場に立っていた中曾根元幹事長が、その態度を微妙に変化させ、これをきっかけに、三木、福田、中曾根三派の間に提携の動きが活発化した。

一連の二回目の実力者会談が物分れに終わった時点では、もう話合いで政局を收拾する余地はほとんどなくなっていた。非主流派は反主流派となった。それでも中間派の幹部連が総理・總裁の分離案を提示して收拾に動いたが、大平首相は政党内閣制の本筋を守る意味からこれを受け入れることに難色を示した。

二十九日に大平首相から最終案として、「総裁の進退問題を含む責任問題の処理についての取りまとめを西村副総裁に任ずる。取りまとめの結果についてはこれに従うものとする」という案が役員会に伝えられた。西村副総裁はこれにもとづいて三木、福田、中曽根の三者に、「大平総裁も一任したのだから、三氏も調整を一任するよう」に求めたが、三者の一任が得られず、三十一日、西村副総裁は二十日余りにわたる調整工作を断念した。

こうなれば、大平支持の大平・田中陣営と倒閣を目指す三木・福田・中曽根の三派連合は、それぞれの主張に従ってわが道をつき進む以外になかった。

総選挙以来二十余日を経過し、憲法で定められた特別国会召集の最終日まで七、八日を余すのみになると、両陣営はそれぞれ独自の戦略を立て、ぎりぎりの決戦に備えて態勢固めに入った。大平支持陣営は、党則に従い党の意思決定機関である両院議員総会を開き、ここで党の首班指名候補として大平総裁を推すことを党議として決定する方向を固めた。これに対し、反主流三派は、二十九日夜の三木、福田、中曽根三首脳会談を皮切りに、それまで舞台裏で進行していた連携工作を公然と表面化させ、受け皿の一本化に向かいはじめた。

両者の意思決定が行われず、自民党の首班指名候補が未定のまま三十日には特別国会が召集された。翌十月三十一日、反主流三派を中心に「自民党をよくする会」が結成され、結束を固めた上、翌十一月一日、三木、福田、中曽根の三者会談で福田前首相を非主流の統一首班指名候補とすることが決定された。その方策としては、反主流が数の上で優位に立ちうる代議士会での決着が目論まれた。

かくして大平支持陣営は両院議員総会、反大平陣営は代議士会とそれぞれの主張と戦略に従ってどれだけの議員を結果しつるかが最大の目標となった。それぞれの派閥に属する議員の数からすると次のようになる。

	衆議院	参議院	計
大平派	五一	二三	七四
田中派	四八	三四	八二

福田派	五〇	二九	七九
中曾根派	四〇	八	四八
三木派	三〇	一一	四一
中間派	二一	一九	五七
無派閥	一七		
合計	二五七	一二四	三八一

この数で見られるように、代議士会（衆議院議員総会）だけで見るならば、大平支持は九十九名、反大平は百二十名と、反大平側が基礎数で約二十名も優位に立っている。中間派、無派閥の三十八名がどちらにつくかで勝負がつくが、大勢としては反大平勢力の方が優位であることは明らかであった。

一方、両院議員総会で見ると、大平支持は百五十六名、反大平が百六十八名と両派の勢力はほぼ拮抗するが、中間派や無派閥に大平支持勢力が強く、大平側が優位になる見通しであった。その意味からすれば、大平支持陣営、福田支持陣営ともそれぞれ数の上で自派に有利な土俵を選んで戦う道を進んで行ったわけである。

この間に、十月二十七日には対岸の韓国の朴大統領が射殺されるという事件が起こり、大平首相はいったんは葬儀へ出席の方針を決めたが、党内の抗争のためこれも許されず、代わって岸元首相が特使として葬儀に参列した。

また、西村副総裁が最後の收拾努力を続けている十月三十日、五年前同じく副総裁として裁定を下し、政局を收拾した椎名元副総裁の党葬が営まれた。大平・田中連合対三木・福田・中曾根の三派連合の対決という図式は奇しくも全く同じであったが、五年後のこの時点では裁定で党内抗争がおさまるといった状態ではなかった。

大平支持陣営、反大平陣営がともに強気の構えを捨てなかつたので、両派は十一月二日午前の両院議員総会と代議士会でそれぞれ数を競い合うこととなった。党執行部は十一月二日、午前十一時三十分から党本部九階の会議場で両院議員総会を開く方針を決定した。一方、反主流派は、二日午前九時からの副幹事長会議で『代議士会で（首班指名候補を）決

るように主張し、『本会議の首班指名選挙では、二位のものは一位のものを支持する』よう申し入れた。これによって、両院議員総会の三十分前に、反主流派は院内で代議士会を開き、独自の候補として福田前首相を推すこととなった。

両院議員総会の舞台である党本部のホールには、衆参両院議員と大平支持陣営の関係者がつめかけていた。十一時十五分過ぎ頃、中曽根派の渡辺美智雄、武藤嘉文、木村武千代、野中英二、大石千八の五議員が満場の拍手に迎えられて入場してきた。中間派からも浜田幸一ら予定通りの出席が得られた。この総会の出席者は、衆議院議員百二十五名、参議院議員七十五名、合計二百名で過半数を超えた。

一方、反主流派の院内代議士会には百十七名の代議士が出席した。

衆議院について見るなら、病氣や立場上双方に出席しかねる議員が十五名あり、その動向によっては八名の差で逆転するおそれがあった。また、この両院議員総会にも出席した反主流派議員や中間、無派閥の議員に対しては、所属派閥やそれぞれの陣営から翻意を促す工作が進められることは確実であり、僅差だけに全く予断を許さない情勢であった。

この夕刻、舞台は院内に移った。濹尾衆議院議長は『同じ党から二人の首班指名候補が出ることは好ましくない。自民党の混乱を国会に持ち込まれては困る』と本会議の開会に難色を示した。

これを機に自民党は分裂を覚悟で本会議に突っこむか、話合いによって両陣営最後の調整をはかるか、ぎりぎりの瀬戸際に追いこまれた。西村副総裁、金丸国対委員長、安倍前官房長官らが来年一月の定期党大会で総裁の改選を含みとする妥協案をもって大平、福田の間の調整を働きかけた。しかし、反主流の内部には分裂しても決戦に突入すべきだとする強硬論の突上げも強く、事態は極度に緊迫していた。

二日の衆議院議員運営委員会の理事会で同一党内から二人の首班指名候補が出ることに難色を示す野党理事に、反主流派の理事が「新会派の結成準備中である」（自民党を脱党して新党派を作る）と発言し、この噂が流れた院内は一瞬衝撃に打たれた。また、金丸国対委員長が事態收拾のため福田前首相と会談している席に中野四郎（福田派）が飛びこんできて、

「党を割るつもりなのに、(金丸の)話に乗ってはいかん」と横槍を入れる一幕も伝えられた。こうした一連の事態は主流派に党が分裂の崖淵にきていることを思わせた。反主流派の本会議引延ばし戦術のため本会議は流れ、十一月三日の文化の日、四日の日曜日の二日間の休日に入り、決戦は週明けに持ち越された。

主流、反主流の議員数の差は極めて小さく、勝負の行方は不明である。両派の票固めは最後の瞬間まで続けられた。一票が政権を失うか、政権に返り咲くかの重みとなっていた。しかも、どちらにしても党分裂の危機がかかっていた。大平も福田も三木も議員に直接働きかけの電話をしていた。中曽根派では渡辺を除名し、両院議員総会出席者を裏切りもの呼ばわりしていた。

自民党のこのような動きに対して、野党各党の動きが微妙になった。社会党は、野党が結束して政権を奪取しようと呼びかけ、民社党は、自民党が分裂したら連合か連立の可能性があるものとして、その事態を積極的に待つ姿勢を示した。公明党、新自由クラブの動きも予断を許さなかった。

ここまでくると、自民党主流、反主流の争いは、大平、福田のいずれが首班になるのかという問題を超えて、野党各党を巻きこみ、政局は、政界再編成前夜の様相を呈するにいたった。首班指名選挙にかけられているのは、二十五年間にわたって政権を担当してきた自由民主党の命脈が尽きたのか否か、という問題であった。衆議院における首班指名であるため、議員はすべて自分の氏名を明記して投票しなければならぬ。議員にしてみれば、それは、政局の動向への選択であると同時に、自らの政治信念が問われる苛酷な踏み絵でもあった。

大平にとって勝つことは重大であった。それは、党の分裂を回避する道であって、勝負以上にその方が重要であった。小党分立、政局の混迷だけは何としても避けなければならない。野党との連立を意識し、民社党、新自由クラブに積極的に働きかけているとの噂される反主流派を党内に踏み止まらせるためには、大平が福田に勝つてその道を閉ざす以外に方法がなかった。ここにいたって、表の話合いや多数派工作と並行して裏では野党各党に対する働きかけが両陣営から進め

られたが、五日には、公明、民社両党は、それぞれの党首を立てて本会議に臨むことが最終的に決定された。これによって、社会党、共産党とも自民党の党内抗争に巻き込まれることは避け、独自の候補で戦うことが決まり、新自由クラブの去だけが残された。大平派では田中官房長官、佐々木義武副幹事長らが中心となり、新自由クラブとの接触がはかられていたが、五日夜、大平首相と新自由クラブの河野洋平代表との間で最終的合意が確認された。

五日いっばい続いた大平、福田の話し合いも、反主流派強硬論者の突上げによって物別れに終わり、十一月六日の本会議に自民党は分裂状態のまま突っこまざるをえなくなった。その深夜、永田町界限にはさまざまな噂が流れ、両陣営とも徹夜の票固めが行われた。

決戦当日の六日、大平首相は午前六時には起床し、最後の点検を行った。その結果は第一回の投票で新自由クラブの四票を除き、五票前後で勝ちと見られた。

午後一時、首班指名の本会議が開かれた。三、四名がひっくり返れば逆転する僅差だけに、投票結果を待つ間は大平支持陣営にとって、胸の痛くなるような緊張の時間であった。灘尾議長から、

大平	正芳	一三五
福田	赳夫	一二五
飛鳥田	一雄	一〇七
竹入	義勝	六八
宮本	顕治	四一
佐々木	良作	三六
田	英夫	二
無効		七

と、投票結果が発表された。予想通りの結果である。だが、むろん過半数にはほど遠い。大平、福田の決選投票となるま

で、衆議院本会議は休憩された。福田が決選で降り、党は大平一本でまとまるか、それとも福田があくまで決選を争うか、さらに野党の各党が決選投票でどのような態度に出るか、不気味な三十分間が過ぎた。

福田は決選に出るときまり、投票は三時二十分に開始された。その結果、大平は、福田に十七票差、百三十八票で、首班に指名された。野党は無効票を投じた。大平首相は、院内回りのあと官邸に入った。総選挙後三十一日ぶりの決着であった。この記名投票による決着はさまざま人間模様を浮彫りにした。大平、田中の両主流派からは一人の落ちこぼれもなかったが、福田、三木、中曽根の反主流各派は、それぞれ派閥の統制に従わないものを出した。第一回投票で反主流から大平支持に回ったものには、福田派では園田直、三木派では塩谷一夫、地崎宇三郎、中曽根派では越智伊平、大石千八、木村武千代、野中英二、武藤嘉文、およびすでに同派を除名された渡辺美智雄があった。このほか決選投票では、三木派の有馬元治、鯨岡兵輔、無派閥では木村俊夫が大平支持に回った。

大平は首班に指名されたあと、記者たちのインタビューに答えて、「熱いお湯の中に長い間つかり通しだったのが、やっと解放されたという感じだ。しかし、これからもっと熱い湯に入らなければならぬので大変だと思っている」と述べた。大平首相は四時半、首相官邸で首相・党五役会議を開き、その夜のうちに三木、福田、中曽根の三者を私邸に訪ね協力を要請し、挙党体制をつくる方針を決めた。大平は疲れ切った身体をひきずるようにして福田前首相、三木元首相をそれぞれ私邸に訪ねた。これに対し、反主流三派は翌七日、会議を開き、「是々非々」で臨むことを申し合わせた。

最初の関門は党三役の人事であった。大平首相は、「人事は公正にやる。幹事長は総裁派閥からは出さない」という方針を打ち出したが、反主流側は、「人事の窓口を井出一太郎（三木派）一本とし、最終判断は三木、福田、中曽根である」との方針を決めたため、三役人事は膠着した。

この報を聞いた大平首相はひとり官邸の執務室に姿を消した。後を追って、加藤紘一官房副長官が入ると、首相は、「どこまでやるんだ、このままで行ったら、野党の良心的な人たちと提携してやって行くよりほかなくなる」と暗然とした表情をした。

八日、首相は、党人事を後にして組閣を進めることとし、午後八時四十分、第二次大平内閣の組閣が完了した。文相だけは新自由クラブの田川誠一代行を含みとして総理が兼任することとなったが、新自由クラブ内で反論が強く、結局、十日大平派の谷垣専一が起用された。閣僚のメンバーは、次のとおりである。倉石忠雄法務、大来佐武郎外務、竹下登大蔵、谷垣専一文部、野呂恭一厚生、武藤嘉文農水、佐々木義武通産、地崎宇三郎運輸、大西正男郵政、藤波孝生労働、渡辺栄一建設、後藤田正晴自治、小淵恵三総務、宇野宗佑行管、久保田円次防衛、正示啓次郎経企、長田裕二科学技術、土屋義彦環境、園田清充国土。そして官房長官には、大平首相の腹心、伊東正義が就任した。

この人事の特徴は、倉石、竹下、佐々木の三人以外は新人であり、外相に民間人を起用していることであった。

党人事は組閣後一週間たった一月十六日に決まった。幹事長には中曾根派の桜内義雄が起用された。その誠実な人柄が荒れ果てた党内融和のためには適任であると見られた。また、前回幹事長の就任を反対された鈴木善幸が手なれた総務会長につき、福田派からは福田の後継者と見られる若手の安倍晋太郎が政調会長に登用された。ここにも若い人材育成の配慮があった。

こうして人事もようやく終わり、さしもの四十日間の抗争も終止符が打たれた。

この事件の最終場面近く、党分裂の危機を回避するため最後の努力を続けているとき、大福間の調整に奔走していたある国会議員にむかって大平はこう言った。

「僕の名誉は傷ついただけ傷ついてしまった。もうこれ以上傷ついても失うものはなにもないだろう。僕の名誉を損なうことで先方が満足するならどんなことでも甘受しよう……」

数の対決の上で大平は勝ったが、最も深く傷ついたのも大平であった。そして、その唯一のむくい、自由民主党という政党を分裂から救ったことだったのである。

票決の終わった翌七日の朝刊は、大平内閣の傷だらけの再出発を報じた。